

〔解題〕

夢の話

妙幢淨慧が「夢」に並々ならぬ関心を抱いていたことは、知道の『夢知識』に序文を寄せていることから知られよう¹⁾。知道はもと中院中将と称した人で、出家して東山白毫寺に住んだ。弘安年中（一二七八—一二八八）に活躍した東密の明匠である。この知道の遺著『夢知識』を湖東畔の実岩居士が淨慧に校閲と序文を乞うて元禄十四（二七〇一）年八月に刊行したのであるが、淨慧はその序文において「夢知識」とは「夢を師として夢を破す。謂つ可し。夢をして説法せしむる」と定義し、知道もまた『夢知識』において次のように言っている。（以下、原文引用は校訂して示す）

夢も見ル時は實ニ有リと思へ共。覺めては空しと云フ事を知りぬ。覺めて後に跡なきにて知りぬ。見ル時も本より空しと云フ事を。現に見る所の事も其時は實ニ有る心地すれ共。時過キぬれば只夢に同じ。我身を夢と知らぬ程は。善を修すれば人天の身を受け。惡を造れば三惡趣の身を受く。善惡は替れ共生死の身をば未ッ捨テ。若し我身即チ夢ノ内ノ身也と思ひ。見聞覺知は皆夢ノ中の俗と知ぬれば。縦ひ一句の經を讀み一佛の名を唱れども。皆佛因佛行と成て生死の中の身を受ル事なき也。一念なり共大乘の法門を信じ。正く成佛の種子を殖んと可レ思フ也。凡そ一句の文を讀み一佛の名を唱れば無量劫の罪を滅すと云事。佛説なればよも虚言にては侍らじ。

と述べている²⁾。すなわち、この世の一切が空夢であり、夢と同じである。だからこそ信心を深め、怠りなく仏道に励むことが肝要であると説いている。二人はそれぞれ「夢」について考えを抱いていたが、「夢を師として」仏道に励むことの重要性を説いている点において共通し、互いに共感し得るものだったのである。

淨慧自身も『佛神感應錄』において夢に対する独自の見解を示している。所収全十五卷八十五話のうち、標題に「夢」の語を含んだ話が八例もあることから淨慧の夢に対する関心の高さが窺われる。そこで以下これら八例話から淨慧の夢に対する考え方を読み解いてみたい。各話の夢に関する

部分を要約する。

①卷六—二「御堂ノ関白道長公法成寺供養ノ事 附タリ御息女中宮御瑞夢ノ事」
法成寺を建立した藤原道長の娘中宮彰子が、道長の死後間もなく見た夢の話である。夢には若くて賢そうな僧が登場し、道長から文を預かったという。その文には「下品下生」と記されており、父の極楽往生を知った娘はとても喜んだ。

②卷七—一「觀世音童女ノ夢中ニ屢現ジ玉フ事 附タリ童女無常ノ歌讀事」

幼い頃より信心深かった童女が、十歳になると度々觀音菩薩が現れる夢を見るようになり、觀音を深く信仰するようになった。そして十一歳で死期を悟り、「念佛ト共ニ消」た。生前の極めて老成した様子や、死後仏壇に觀音の種子に似た字が現れたことなどから、娘は觀音の化身であったのだらうと人々は言い合った。

③卷七—二「阿彌陀如來ノ告ニヨツテ亡女夢中ニ母ヲ覺事 附タリ觀音ノ化身タルベキノ事」

幼い頃より信心深かった少女が若くして亡くなったが、母の願いを受けて、母の夢に度々登場して慰めて帰った。その後父母は、娘の導きに従い、仏道に深く帰依するようになった。

④卷十一—一「三智坊ノ夢ノ告ニ依。舍利并ニ五銖ヲ感得シ。及温泉湧イヅル事 附タリ光明眞言ヲ。書丸テ病ヲ愈事」

三智坊という信心深い人の夢に空海が登場し、「汝が精進を随喜して、夢に現れたのだ」と言い、仏舍利と五銖が埋まっている場所や薬湯が出る場所を告げた。その後、三智坊は高野山に入り、益々修行に励んだ。

⑤卷十一—七「光明眞言ヲ誦ジテ。魔魅鬼退事 附タリ惡鬼怖去ト夢ミル事」

夜ごと悪夢を見ていた人が、信心深い人の助言により夢の中で光明眞言を思い浮かべるようになった。悪夢をみるのがなくなった。また、別の人が、赤鬼に苦しめられる夢を見た時、光明眞言を唱えると赤鬼が去ったところで夢がさめた。光明眞言には一切の天神地祇ならびに靈鬼なども歓喜悦可する

力があると言われている。

⑥卷十一「華嚴經善知識ノ名ノ功德ノ事 附タリ悪夢見シ時ノ咒ノ事」

原因不明の病で牛馬が死んでいく村に通りがかった僧が、夢のお告げに従って「婆娑婆演底主夜神」と書いたものをお守りとして村民に配り、牛馬の尾に貼ったところ、どの牛馬もたちまち健やかになった。

⑦卷十二「阿彌陀經讀誦ノ功ニ由金殿ニ積經ヲユメミル事 附タリ唯一禪師緊那羅王ヲ夢ムル事」

獨湛という僧が日課の阿彌陀經讀誦を、諸事情で一日分行えなかったところ、その日の夢に、中に沢山の経を積んだ金殿が登場した。ある一角に経が積まれている場所があり、それは読経を行えなかった一日分の空白であった。その夢を見た後、獨湛は益々励んで、日々怠りなく阿彌陀經讀誦を行った。

⑧卷十二「蓮社ノ七祖ノ事 附タリ高泉禪師震旦ニテ南良ノ大佛ヲ夢ムル事」

高泉禪師が震旦にいた時、とても立派な大仏が荒野に鎮座している夢を見た。後に日本に渡って、奈良東大寺の大仏を見た時、夢の中の大仏と同じであったので、深い宿縁を感じた。

以上八話のうち、ここでは特に淨慧の夢に対する考え方が良く表れていると思われる③と⑥の二話に注目したい。

まず③について触れる。夢を見るのは、觀音の化身と言われながらも早世した娘の母である。母は、娘を失った悲しみのあまり、阿彌陀如来に恨み言を言うほどであった。そんな母の夢に娘が現れてこう言う。「彌陀如来ノ母ガイタク嘆ウラミ訴ニモトノ容ニテ暫ユイテ見來トノ玉ハスレバ。コレマデマイリタリ。」「相カマヘテ疑ナク後ノ世ヲ願玉ヘ」と。つまり、娘は「母があまりにも嘆くので、阿彌陀仏の命で夢に出てきました。だから疑うことなく、後の世の菩提をお願いして下さい」と言うのである。そして、なぜ父の夢には出ないのかという点は、「父モ妻ノモノガタリヲキイテウラヤミ思ヘドモ。因縁アサキユヘニヤツイニ夢ミズ」としている。そして、本話の夢に対して淨慧は次のように考察している。「思フニコレ觀音ノカリニ女身ヲ現シテ。宿福濃厚ノ人ノ子トナリ玉ヒツ。機ニシタ

ガツテ導玉フナラン」。つまり淨慧は、觀音が「宿福濃厚」である人の娘に化身して、時機を見て仏道に導いたのではないかと考えている。そして、父は宿縁が浅かったため、娘は夢に現れなかったとしている。さらに、「妙莊嚴王ノ因縁」「馬郎婦ノ方便」「本朝如意ノ尼」を同じような例として挙げている。これらに共通するのは、生まれついて徳はあるのだが、今世での信心が足りない者のために、觀音などが身近な者に化身して、信心を導くという点である。

次に⑥について触れる。ある僧が通りがかった村では、牛馬が次々と死傷し、村人が困っていた。村に留まった僧が、ある夜「誰トハナクバサンバエンテイシユヤジント書テ。牛馬ノ守トナザハ。止ベシトイヘリ」という夢を見た。しかし「バサンバエンテイシユヤジン」が何のことか分からないうちに日々が過ぎた。ある日、反古紙集めを生業としている人から譲り受けた書に「婆娑婆演底主夜神」とあるのを見つけた。それによると「婆娑婆演底主夜神」とは『華嚴經』に登場する神であることが分かった。早速夢告にあつたとおり「婆娑婆演底主夜神」と書いた紙をお守りとして村民に配り、牛馬の尾に貼ったところ、どの牛馬もたちまち健やかになったという。そして、この話を僧の友から伝え聞いた淨慧は、夢に対する考え方を「凡夢ハアダナルモノナレトモ。或ハ天人夢。及善悪先徴夢ナドアレ」と記し、割注で天人夢と善悪先徴夢の違いを次のように述べている。

天人夢ト云フガ。スナハチ天人カネテ夢中ニ。善悪吉凶ヲツグナルレバ。善悪先徴夢トヲナジヤウナルコトナレド天人ノ告ナラデ。別因縁アツテ偶然トシテミルコトアルユヘニ。壽寧寺ノ伯淵師ノ諸乗法数ニモ別々ニイダサレタリ

つまり、夢は本来いい加減なものであるが、天人夢や善悪先徴夢というものがある。天人夢は「天人の告」であり、善悪先徴夢は前後の因縁とは別に偶然にみるものであるという。そして、本話の結びとして次のように述べている。

抑カノ僧前ノ夜婆娑婆演底守夜神トミテ次ノ且ニ圖ザルニコレヲ感得スル

コトハ蓋コレ天人ノ預示セルナラン亦是村民牛馬ノ福幸ナリ。加之カノ名ヲ唱テ悪夢ヲ辟ノ功アリトスルトキハ謂ベシ断悪修善ノ鴻名ナリト。

つまり、かの僧が前の晩に「婆珊婆演底主夜神」を夢で見て、次の日に思いがけずそれが何かを感得したということは、これは天人が導いたに違いない。また、これにより村民・牛馬が幸福になっただけでなく「婆珊婆演底主夜神」の名を唱えたと悪夢が去るといふ力もあるという。これは、かの僧が悪を断ち、仏道に励んだことへの仏からの恩恵であろうと述べている。

以上の二話を手掛かりに、浄慧の夢に対する考え方をまとめてみると次のようになる。すなわち夢には意味があまりないものが多いが、中には天人の告である「天人夢」と、未来の出来事を予知する「善悪先徴夢」がある。中でも「天人夢」は、神仏に因縁や宿縁がある人物が見て、その後は益々神仏に深く帰依し、精進するよう導かれる。



檀王法林寺版
婆珊婆演底主夜神
(宮島コレクション蔵)

この考え方は、「(浄慧は)天や仏菩薩の夢中の教誨」すなわち天人夢は、「僧として戒律を守り徳を積むことが肝要」であると理解し、「獨湛が夢中に天人の教誨を受け、覚後にさらに仏道に精進したのは徳あつてのことであると賛している」という指摘に通じている。

繰り返しになるが、浄慧は、天人夢を見る人物には、生来、神仏との深い因縁があり、それは今世での精進により積んだ徳や、前世からの宿縁の場合があり、そういった人物が、天人夢を見たことにより、さらに神仏の

道に励み、精進につながり、それは夢を見た人に徳あるゆえであると称えている。

この浄慧の夢に対する考え方は興味深い。なぜなら、現代における研究では、物語や説話における夢告、浄慧の言葉でいう天人夢は、異界や神仏と、人間がつながる重要な手段であることは多くの人々が指摘している⁴、夢を見る人の特徴に関してはあまり論じられて来なかったからである。江戸期の浄慧が、すでに一歩踏み込んだ考察を、『佛神感應録』で行っているという点は大変興味深く、注目すべきことである。例えば、小峯和明氏は「夢は異界とこちらを結ぶ回路、通路である。異界の異類や神仏とは、夢を通して出会い、交信できるしくみであった」とし、「ことに浄土などとの交渉をテーマとする靈験譚は夢が欠かせなかった。夢を媒介に靈験のイメージがはぐくまれていたといえる」と述べている⁵。つまり、靈験譚を語る上で、異界と現実の橋渡しをするために夢は欠かせないものとしている。これは、多くの研究者が述べている意見と共通する代表的な考え方である。一方、倉本一宏氏は「(説話文学の)編者は登場人物の見た『夢』を、かならずしも『神仏からのメッセージ』と認識しているわけではなく、自己の作品の『主張』に都合よく利用している」とし、編者から見た側面を指摘し、個性的な意見として際立っている⁶。しかしいずれも、靈験譚は仏道を広めるための一つの手段であり、ましてや夢を通して異界と交信することは現実にはありえないもので、事実ではないという前提で、分析を行っているように思われる。そのため、靈験譚における夢は、物語を語るために古くから使用されている一つの型という認識にとどまっている。それに対し浄慧は、『佛神感應録』で紹介している夢の話は、現実にあつたものであり、仏道に励む人への深い共感と敬意から、なぜそのような現象が起ったのかという点について深く興味を持ち、冷静に分析している点が優れていると言える。

また、『佛神感應録』に収録されている以外の説話にも、浄慧の夢に対する考え方が適用できる点も指摘したい。例えば江戸時代の僧である徳本(二七五八―一八一八)の伝記である『徳本行者伝』⁷にも夢告が度々登場する。その一例を要約して紹介する。

徳本は生まれながらにして信心深く、仏道に帰依する志が強かったが、両親に出家を反対され、密かに勤行する毎日であった。父亡き後、母の救しを得、二十七歳で得度、出家した。そのちは、炒麦（むぎこ）一合のみを一日の食料とし、昼夜修行に励んだ。ある夜の夢に十一面観音が告げるには「汝は私のところに来るがよい。私のところで修行すれば、得るところが多いであろう」という。目覚めた後、十一面観音の霊跡を探したところ、落合谷という地を探し当てた。ここには白山権現の社があり、その社の本地仏は十一面観音であったという。その後、これまで以上の苦行錬行を行うことになるが、その発心をしたのはこの地であったという。



徳本修行の図（往生寺蔵『徳本行者絵巻』）

この夢告の話を浄慧の考えと照らし合わせた場合、徳本はこの夢告の前に、念願の出家を果たし、自らに厳しい修行を課している。仏道に身も心も深く入り込み始めたところで夢告を受け、夢中で示された落合谷でさらなる苦行を積み、教化僧として大きく飛躍することとなる。浄慧が指摘する、『天人夢』は、神仏に因縁や宿縁がある人物が見て、その後は益々神仏に深く帰依し、精進するようになる」という考えがそのまま当てはまる。また、平安時代末期に編まれた『今昔物語集』にもいくつか神仏による夢告の話が収められており、そのうち、卷第十三第七「比叡ノ山ノ西塔ノ僧道榮ノ語」と同卷第三十二「比叡ノ山ノ西塔ノ僧法壽、誦法花語」を紹介する。まず、第七の要約を紹介する。

比叡山西塔の僧、道榮が「私は本山に住するといえども、顕密の正教において習得できたものはなかった。今生はいたずらに過ぎてしまったが、後世の貯えがなければ二世において不徳の身となってしまうであろう。だから、法華経を書写し奉ろう」と考え実践した。その後、遂に臨終を待つ身となった時の夢に、宝塔が現れ、その中には沢山の経が収められていた。目前に現れた梵天・帝釈天に似た人が「その経は、道榮がこれまで書写した経が積まれたものである。汝はこの塔と一緒に兜率天に生まれ変わるであろう」と告げたという。その後はさらに心を入れて、書写供養を欠かすことがなかった。

この話は、『佛神感應録』卷十二「阿彌陀經讀誦ノ功ニ由金殿ニ積經ヲユメミル事」に似た内容である点も興味深い。次に第三十二を要約する。

比叡山西塔の僧法壽は、天台座主遍賀僧止の弟子であった。心根は素直で、振る舞いには貴さがにじみでていた。若くして比叡山に上って出家し、師に従って法華経を受け習った後は、毎日一部を必ず読誦し、これを一生の間の務めとした。ある時の夢に、法壽が常に持ち歩いていた法華経が西方の空に飛んで行ってしまった。大切にしていた経を失ってしまったと嘆いていたところ、傍に紫の衣を着た老僧が現れて告げるには「汝は経を失ったわけではない。一足先に極楽に送り置いたのだ。汝も三か月後に極楽に生まれるので、沐浴精進して迎えを待ちなさい」という。その後は、身の回りを整理し、山に籠ってひたすら法華経を読誦し念仏を唱えていると、程を経ずして病を受けた。法華経を誦し、念佛を唱えながら入滅した。

右の『今昔物語集』の二話においても、「天人夢は、神仏に因縁や宿縁がある人物が見て、その後は益々神仏に深く帰依し、精進するようになる」という指摘が適合する。

このように、浄慧の考え方は、多くの説話や伝記の夢告に適合できる可能性があり、説得力のある普遍的な指摘と言えよう。それは、浄慧の分析結果が優れていることの証明ともなる。さらに、冒頭でも触れたとおり浄慧は『夢知識』の序に「夢を師として夢を破す。謂つ可し。

夢をして説法せしむる」と定義しているが、今回紹介した『佛神感應録』の各話では「夢を師として」仏道に励む徳ある人々への淨慧の深い敬意が際立って見える。そして、その想いは、自らも仏道に精進する一人としての深い共感からくるものであろう。仏道に心身ともに捧げた淨慧の並々ならぬ探究心から導き出される深い洞察力は、現代の私たちにとっても示唆に富み、多くのことを学び取ることができる。

(大久保)

〔注〕

- 1 西田耕三『近世の僧と文学』二〇一〇年、ベリかん社。
- 2 知道上人撰『夢知識物語』(長谷宝秀編『真言宗安心全書』巻下所収。一九七三年、種智院大学)。
- 3 阿部・大久保・塚本・関口「妙幢淨慧撰『佛神感應録』翻刻と解題(一)」(『学苑』九百二十四号、二〇一七年十月) 一三頁(関口「解題」)。
- 4 趙智英「『宇治拾遺物語』における「夢」の分類」(『同志社国文学』八十五号、二〇一六年十二月) 等。
- 5 小峯和明校注『今昔物語集二』(新日本古典文学大系三十四。一九九九年、岩波書店)「解説」三九三頁。
- 6 倉本一宏「平安朝説話文学に見える『夢』」(『日本文化研究』七号、二〇〇七年三月) 一九二頁。
- 7 福田行誠編『徳本行者伝』全三巻。慶応三(一八六七)年刊。翻刻がある。戸松啓真編『徳本行者全集』第五巻(一九七九年、山喜房仏書林)・浄土宗開宗八百年記念慶讃準備局『浄土宗全書』第十八巻(一九七五年、山喜房仏書林)等。
- 8 山田孝雄他校注『今昔物語集三』(日本古典文学大系二十四。一九六一年、岩波書店)に拠る。

〔翻刻凡例〕

- 一、名古屋大学図書館蔵『佛神感應録』後集を底本とした。同図書館に謝意を表す。
- 一、可能なかぎり原文の表記を尊重し、明らかな誤刻もそのまま翻刻した。ただし、「玉・玉」「未・末」「己・己」「巳」等の混用表記は文意をとって適字を置き、「丁」(コト)等の合字は通行の表記に改め、摺墨の濃淡等による判読不能の文字は字数分の空格(□)を置いた。
- 一、半丁ごとに丁数を示し、各話末行と次話題との間に空行を置いた。